通時的・共時的語彙ネットワークにおける慣用句

中川　純子

1.　はじめに

Phraseologismus（慣用句）は複数の語からなる言語表現形式であり，習慣的に決まった組み合わせの連語句が一定の意味を担って用いられるものである。慣用句の意味は構成語の意味の総和とは必ずしも一致せず，統語的にも各々に制約があり，連語句でありながら単語と比較しうる独自の語彙単位を形成している。慣用句はこれまでの研究において様々な定義をされているが，一般には，構成語が意味的・統語的に安定した関係にあり（Stabilität od. Festigkeit），同じ組み合わせで習慣的に繰り返し用いられ（Reproduzierbarkeit od. Lexikalisiertheit），その意味は構成語の意味からは直接導き出せない（Idiomatizität）とされる。しかし実際にはこれらはいずれも程度問題であり，どの程度までを慣用句と考えるか，あるいはどの基準を優先させるかなどで議論が続いており，研究者によって定義も認定も未だにばらつきがある。もともと言語表現は慣用句に限らず大なり小なり習慣的な表現の集積であり，慣用句をほかの言語現象から切り離して定義しようとすれば便宜的なものにならざるをえない。本稿の目的は，慣用句とその他の言語現象との連続性，そしてカオスとも言われる様々なタイプの変化現象は言語変化という視点から見直すことで体系的に説明できることを示すことである。

2. 分析の目的と方法

これまでの慣用句研究では慣用句の特殊性が強調されたり，いわゆる典型的な慣用句のみが分析の対象になることがほとんどで，変形や，その他の言語現象との相関関係について体系的な研究が十分になされてこなかった。変形に言及した一部の研究においてもいわゆる「基本形」からどのように逸脱しているのかを形態的・統語的に分類するにとどまっている場合が多い。変形の意味的・コミュニケーション機能的な面に注目した分類は，Burger u. a.（1982）のModifikationという概念が唯一である。本稿では慣用句の定義を曖昧にしている大きな原因の一つはいわゆる「基本形」,「変形」という対立の視点であると考え，全ての形は語彙システムの通時的・共時的ネットワークの中で等価であり，その時々の語の発展段階を反映しているという観点に立つ。変化は言語の常態であり慣用句も例外ではない。多くの言語表現において，変化した形式は元の形式と同様に共同体の語彙の中に一定期間共存する。つまり共時的には様々な発展段階の表現が渾然と併用されていることになる。慣用句と呼ばれるものの場合も同様で，当然ながら最初から慣用句として出現したのではなく，ある自由語結合（freie Wortverbindung）が習慣的に慣用句と呼ばれるような特性を備えるようになっていったのである。従って，一つの言語の語彙の中には「まだ」慣用句とは呼べないものから,「もう」慣用句とは言えないものまで段階的に存在していると考えられる。つまりは共時的に見て，自由語結合との境界の曖昧さや，一つの慣用句に様々な形が存在する現象は例外や逸脱などではなく，むしろ通常のことであると考えなければならない。

慣用句の様々な変形を言語変化のプロセスとして説明するには一つの慣用句の複数の形に対して，どちらが一次的か，ということを決める必要がある。従来の慣用句の歴史研究でも指摘されるように，古い文献をコーパスとして慣用句の変遷を研究することには多くの問題点と困難がある[1)]。本稿では，過去の文献を通事的に比較分析することによってではなく，言語

変化の普遍的な現象から導き出された法則と比較することで，慣用句の変化のプロセスを共時的にみられる形の中に分析する。言語の変化は実際のコミュニケーションの場でおこる。変化を促す最大の要因は意識・無意識の人間の発話ストラテジーである。コミュニケーションにおける慣用句の役割は，言語におけるメタファーの必要性・役割と密接な関連がある。なぜなら慣用句は広い意味で「習慣化されたメタファー」と言えるからである。本稿では慣用句の変遷・変化の諸相をコミュニケーションにおけるメタファーの役割，そしてその習慣化がもたらす表現力の喪失が形式にどう反映するかという視点から論じる。3章で慣用句の定義に関する先行研究をまとめ，その問題点を指摘した後，4章で変形のプロセスを根拠づける発話のストラテジーとメタファーの関係，それを反映した言語の形式変化の相関関係を論じ，5章で慣用句の様々な変形をコーパス で調査し[2]，4章でたてた変形と慣用句の発展段階に関する仮説を実証する。

3.　慣用句の定義と範囲

慣用句は言語共同体の生活や価値観と関係したメタファーが多いため，学問的には文化・社会・民俗学的なテーマの研究材料とされ，純粋に言語学的アプローチをされるようになったのはここ数十年のことである。研究の歴史が浅いこともあり，先に述べたように認定基準にも用語の解釈にも

---

1) ある連語句が慣用句であるかどうかは形式によって決定できるとは限らず，多くの場合，語感が拠り所になる。また仮に慣用句であることが認められたとしても，慣用句の分析に大きな役割を演じるコノテーションやテキスト中の機能などは母語話者でなければ最終的な判断は難しい。古い文献の場合，同時代の母語話者はすでに存在しないことから，多くの点で十分な分析ができないことになる。（*vgl.* H. Burger/ A. Linke 1998：743）

2) 分析で利用している例文は特別な注釈がない限りインターネット上で公開されているMannheimer Korpus（http://corpora.ids-mannheim.de/~cosmas）の検索によるものである。

いまだに揺れがあり定義も一定していない。しかし近年のほとんどの研究における定義は，慣用句の代表的な研究者であるW. FleischerとH. Burgerの二人のどちらかの説に依拠したものであるか，そのアレンジである場合が多いと言ってよい。両者の定義は用語や切り口等に違いはあるものの，基本的にはそれほど大きな差異があるわけではない。以下に，FleischerとBurgerの説を中心に慣用句の定義を挙げ，未だに論議を呼ぶ慣用句という単位の問題点を明らかにする。

3.1. 安定性（Stabilität）

固定性（Festigkeit, Fixiertheit）とも呼ばれるが，慣用句の構成語は慣用句全体の意味に影響を与えることなく他の語に入れ替えることは出来ないという性質を指す。たとえば以下のように構成語の一つを同義語と置き換えることは不可能である。

1）jm an den Wagen fahren（人にひどいことを言う，侮辱する）
*jm an das Auto fahren

また慣用句の構成語の一つを単語レベルで反意語にあたるものと入れ替えても反意関係が成り立たない場合も少なくない。

2）*jm* eine lange Nase machen（人を小馬鹿にする）
**jm* eine kurze Nase machen

慣用句は一般に構成語の入れ替えを許さない統語と意味との緊密な関係によって自由語結合から区別される。しかし一方，単語が入れ替わっても意味的，コミュニケーション機能的に差異はないとされるバリエーション（Variationen）をもつ慣用句も決して少なくないことが近年では指摘されている。例えば下記の対はいずれも同じ慣用句のバリエーションとされ，3）

は他動詞・自動詞，4）は類義語，5）は単・複がそれぞれ異なった形式を作っている。

3）*etw.* in Schutt und Asche legen（物を灰燼に帰せしめる，瓦礫の山にする）
in Schutt und Asche liegen（瓦礫の山である）

4）ein schiefes Gesicht machen（顔をしかめる）
ein schiefes Gesicht ziehen

5）seine Hand bei *etw.* im Spiel haben（物事に関与する）
seine Hände bei *etw.* im Spiel haben

これらの表現はそれぞれが辞書に登録されており，同一の慣用句の別の形とされる。さらに日常のコミュニケーションでは臨時の変形も頻繁にみられる。コミュニケーション上の特定の表現効果をねらって一回限り作られる変形をH. Burger（1982, 1998 u. a.）はModifikationと呼んでVariationと区別した。Variationは，基本形と意味的・コミュニケーション機能的に差異が無く，異なったテキストでも相互に入れ替え可能なのに対して，Modifikationは意味的・コミュニケーション機能的同一性とは無関係に特定のテキストのために作られた変形であり，習慣性もない。Modifikationを一種の言葉遊びと考えて，慣用句の安定性とは別と考えることも出来るが，実際のテキストにあたってみれば慣用句にとっての臨時的変形と習慣的変形は必ずしも簡単に区別できる性質のものではないことがわかる。これらの様々な変形は安定性という概念を基準に据えれば明らかに矛盾した現象であり，慣用句を特別な単位として扱う試みに困難をきたすものである。

3.2. 再生産性（Reproduzierbarkeit）

Lexikalisiertheitとも呼ばれる。これは慣用句がある言語の語彙の中で一

つの完結した単位を形成しているという特徴である。同じ連語句でも自由語結合は発話ごとに新しく「生産」され，文法規則に則った上でテキストごとにその都度組み合わせが決まる。しかし慣用句の場合は言語の文法知識とは別に，その組み合わせを知らなければ使うことが出来ず，新しい発話においてもあらかじめある組み合わせがそのまま用いられる（「再生産」される）のである（Fleischer 1998：62ff.）。慣用句の語構成は共時的に通用する文法規則や単語の意味，語法に必ずしも従っていなくとも良く，その意味で人の意識の中で単語と同様に一単位として記憶されている。この再生産性という概念はこれ自体論議を呼ぶものではない。問題は，人間の発話の中で「再生産」されるのは慣用句だけかということである。近年の談話分析等の成果によれば，人間の発話の大部分は全く初めて作られたものではなく，多かれ少なかれルーティーンな表現の集積である（Stubbs 1997：154）。例えば外国人がある言語を習得しようとした場合，文法規則と語彙集だけでは決して自然な会話をつくりあげることはできない。言語表現はある意味で全て表現単位で覚えなければならない慣用的なものなのである。「歯を磨く」のはZähne putzenであって，Zähne bürstenやZähne polierenではないこと，「スープを飲む」のはSuppe essenであってSuppe trinkenではないのは文法規則や単語の意味の問題ではなく表現の習慣性の問題である。日常生活に関わる表現のほか，公な場面，冠婚葬祭や伝統行事の台詞などにはパターン化されたものが数多く存在する（*vgl.* F. Coulmas 1981：14）。つまりReproduzierbarkeitは程度の差はあれ様々な言語表現に見られる特徴であることがわかる。

3.3. イディオム性（Idiomatizität）

イディオム性とは，慣用句を構成する語の意味と，慣用句全体の表す意味との間の関連性の程度のことである。構成語の意味の加算が直接慣用句の意味であればイディオム性はなく，構成語の意味との関連性が見いだせなければイディオム性が高いということになる。例えば以下の慣用句の場

合，6）よりも7）の方が構成語それぞれの意味と慣用句の意味の関連が直接的である事から，6）の方がイディオム性が高いとされる。

6）die Katze aus dem Sack lassen（真意を漏らす）

7）eine Stadt in Schutt und Asche legen（町を瓦礫の山にする）

「イディオム」という用語は慣用句と同義語のように用いられることもあるが，実際この「イディオム性」には広い解釈の余地があり，研究者の間でも意見には相当のばらつきがある。慣用句の意味と構成語の意味の関連性は大きく分けて二つの観点から議論される。一つは厳密に文字通りの意味を慣用句の意味と比較する観点，もう一つは慣用句を成立させているメタファーが共時的に理解可能な範囲にあるかどうかという観点である[3)]。「文字通り」（wörtlich, literal）かどうかという点については後述のように単語レベルでの意味論の問題にもなる。言語表現には元来，様々なレベルでメタファーが介在しており，ある表現がメタフォリックであるかどうかという判断も曖昧なものにならざるを得ない。例えば6）の慣用句は構成語の組み合わせではじめて全体として一つのメタファーになるため，構成語それぞれの意味と慣用句の意味に直接関係はない。つまりこれはメタフォリックな慣用句である。しかし次のような場合はどうだろうか。

8）*etw.* schwarz sehen（物事を悲観的に考える）

---

3) メタファーを基礎にしていない慣用句（Fleischer 1997: 33）を区別したり，メタファーのほか，メトノミーやシネクドックなどを分類する場合もあるが，このような区分に関してこれまで十分な議論が行われていないこと，本稿のテーマにこれらの厳密な区分が直接関係しないことから本稿では慣用句の大部分を占める，メタファーをベースにした慣用句を考察の対象とする。

これもメタフォリックな慣用句であるように思われるが，辞書でsehenとschwarzをそれぞれ引けばschwarzには「不吉な，悲観的な」という語義が，sehenにも「把握する，認識する，考える」という語義が記載されておりこの組み合わせではじめてメタファーが成立するというたぐいのものではない。

肉体的な経験，とりわけ五感に関わる経験を基盤に非肉体的な事態を概念化する現象（この場合は視覚経験。sehenを視覚から抽象概念の認識に転用，schwarzという色彩表現をネガティブな気分を表す表現に転用）は言語を越えてみられる普遍的なものであり（G. Lakoff/M. Johnson 1980: 59, D. Dobrovol'skij/E. Piirainen 1996: 227ff.），どこまでをメタフォリックと考えるかどうかという問題にもなる。色彩形容詞や知覚動詞の他，場所や方向表現も抽象的な事柄の概念化に一般的に用いられる。たとえば以下のような表現である。

9）außer Betracht bleiben（問題外である，考慮されない）

10）in die Jahre kommen（次第に年を取る）

9）については，Betrachtは意味的には文字通りだが，außer ... bleibenという表現によってBetrachtが場所であるかのように表されている。10）ではJahreは文字通りと言えるが，in ... kommenによってやはり出入りの出来る空間のように扱われている。このように文字通りと文字通りではない部分が混在している慣用句はしばしばvollidiomatischに対してteilidiomatischと分類される。しかし抽象的な事態を人間の直接経験に基づいて概念化すること，上記の場合は場所化すること，は慣用句に限らず言語表現一般に見られることであり（例えばin der Meinung, auf der Grundlage, an der Arbeit等のような抽象概念の場所化），メタファーであるとの認識も薄れてきていると言える。抽象概念を「入れ物」のように見なすことからレイコフはこのような概念化を「容器のメタファー」と呼んでいる（G. Lakoff/M. Johson

1980：29ff.）。語源的には空間関係を表す前置詞inが10）のように時間関係を表すこと自体メタフォリックな語義変化なのであるが，共時的にはもはやこれはinの語義の一つに数えられメタフォリックという印象は持ちにくい[4]。以上のことからも判るように「文字通り」という基準が非常に曖昧であるため，本稿では慣用句のイディオム性の程度に関しては，「文字通りかどうか」という観点を置かず，メタファーが同時代的にどの程度理解可能か（*vgl*. durchsichtige od. undurchsichtige Metaphorisierung von Palm 1995：12ff.）という観点のみから論じる。実際に完全に文字通りといえる慣用句は研究書でもほとんど挙げられておらず，本稿の目的である慣用句の発展段階を分析する上でも重要な役割を演じることはないと考えられる。

以上見てきたことからも慣用句という単位があくまでも相対的なものであり形式的にも意味的にもその他の言語現象との差異は段階的であることがわかる。多くの変形の存在もその段階性と密接な関係にある。そこで次に，そのような段階を作る要因，変化を促す要因としての発話のストラテジーと慣用句の関係について検証する。

4.　発話のストラテジーとメタファー

4.1. 発話のストラテジー

Keller（1990, 132ff.）は発話に際して人が無意識に従う原則をMaximeと名付けた。彼によれば人は以下のようなMaximeに従って発話する：

> Rede so, daß du sozial erfolgreich bist, bei möglichst geringen Kosten.（o.a. : 38）

erfolgreich「成功，効果的」というのは人によって，状況によってその内容

---

4) 例えば am Wochenende, im Jahr, in der Nacht などの表現も同様に，時間関係の空間的把握である。

は変わってくるが，いずれにせよ発話者の事情・価値観の中で発話が成功裡に終わることを目的としているのである。そして発話の効果は最低の労力によって最大の効果を上げることが目指される。Kellerは上述の原則をHypermamximeとして最上位に位置づけ，言語変化の観点からstatische Maxime とdynamische Maximeの二つに下位分類した。statische Maximeは言語を安定化，均質化させる役割を果たし，dynamische Maximeは言語に変化を促す役割を果たす。

statische Maxime:

a）あなたがグループの一員であることがわかるように話せ

b）あなたが目立たないように話せ

c）コミュニケーションパートナーの話し方にあわせて話せ

dynamische Maxime:

d）あなたが関心を持たれるように話せ

e）あなたがそのグループに所属していることがわからないように話せ

f）楽しんで，機知に富んで話せ

g）丁寧に，相手の自尊心をくすぐるように，魅力的に話せ

h）不必要な労力を自分にかけないように話せ

a）からh）はいくつかが同時に意図されることもあれば，発話が相互に矛盾したMaximeを同時に含むこともあり得る。本稿では特に言語に変化をもたらすdynamische Maximeに注目し，慣用句の成立と発展はどのように説明できるのかを検証していく。

4.2. 慣用句とメタファー

先にも述べたように，慣用句は広い意味で習慣化されたメタファーと考えることが出来る。メタファーは事態の類似性に基づいて作られるレトリ

ックであり，事態Xを，Yという別の事態との類似性を利用して描写する。しかしXとYが実際によく似ていたのでは単なる言い換えに過ぎない。メタファーが人に印象を与えるためにはその類似性に意外性がなければならないが，あまりに唐突なものであれば人の理解を得ることが出来ない。つまり，意外でありながら聞き手になるほどと思わせ，共感を得るものでなければならない。佐藤信夫（1992）は隠喩（メタファー）の性質について以下のように述べている。

> 多くの成功した隠喩は，人々の共感を呼ぶ性質を備えていたからこそ成功したのであって，言い換えればステレオタイプ化しやすい性質をもつ。（……）成功した隠喩は次々と，ステレオタイプ化されて，辞書に登録されていく。その過程を，反逆的意味作用の勝利とも敗北とも呼ぶことが出来そうだが，おそらくはそのどちらも正しくはなかろう。それは単に言語の本性なのだ。（125ff.）

慣用句化とは，隠喩がステレオタイプ化されていくプロセスであり，慣用句とはステレオタイプ化された隠喩の一種であるといえる。つまり慣用句として存在が認知されていくプロセスは，同時にそれに変わる斬新で印象的な表現が探され始めるプロセスと並行しているのである。

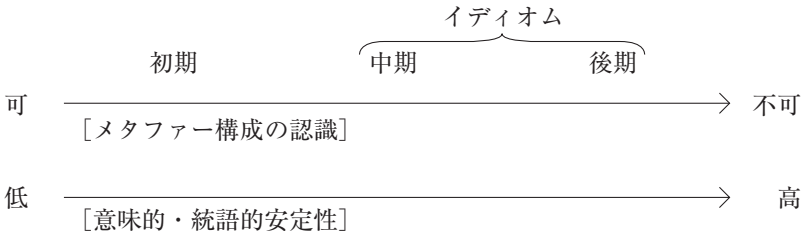
4.3. 発話のストラテジーと慣用句の変化

慣用句として広く認知された（ステレオタイプ化した）表現はdynamische Maximeに沿って変化の作用を受ける。先にも述べたように一つの発話に対して一つのMaximeが該当するのではなく，同時に複数のMaximeが働くことがあり得る上に，それぞれのMaximeを区別することも実際の発話にはほとんど不可能である。言語変化への作用の点で区別すべきはd）からg）までのタイプとh）である。つまりdynamische Maximeのd）からg）は相手に対する効果・影響に関する原則，h）は言語の経済性に関わる原則であ

るというように分類出来る。慣用句はこの効果と経済性の両方のMaximeに関係し，そのバランスの中で成立し，変化の作用を受けている。つまりそのバランスシートの傾きが様々な変形を生むのである。慣用句の使用意図はその含意と表現力にある。慣用句を使用することによって長い説明が不用となり，同時に話者の事態に対する価値観（ほとんどの場合，ネガティブな価値観の反映。*vgl.* Palm 1995: 49）を反映させることも出来る。また，慣用句はその由来を限られた地域や集団の隠語（若者言葉や方言など）や専門用語（一定の職業従事者だけに用いられていた表現や，軍隊用語など）に持つものも多く，成立当初はそれを用いることによって相互の仲間意識や特権意識を喚起するのに役立つという面も認められる。そのようなコミュニケーション上の機能は慣用句が特定の集団を離れ，習慣化，一般化することによって自ずと低下する。含意はありきたりとなり，表現性は低くなる。また時代の変化によってメタファーを形成していた社会背景が失われるとメタファー構成も認識不可能になっていき，表現力の低下に繋がる。慣用句の様々な変形のタイプは描写力の失われつつある慣用句を再び活性化したいという発話意図（効果）と，もはや描写力を期待されなくなった慣用句がひたすら言語経済的に省略されていくプロセス（経済性）から必然的に生まれたものと仮定できる。

以上のことから分析に先立って慣用句の変化のプロセスについて以下のような図式を提示する：

慣用句変化のプロセス



慣用句成立初期の段階では語結合に習慣性があるものの，まだ安定性は低いために多くのバリエーションが存在し，臨時のメタファーとの境も曖昧である。中期では，メタファー構造は同時代的に理解可能だが，高い習慣性，意味と統語の結束性を示す。後期では同時代的にメタファーの理解は不可能となり，用いられている語彙も慣用句外では死語となっている場合もある。この中期と後期の段階に来た慣用句が慣用句研究においてはイディオム性が高いものとして扱われる。先に繰り返し述べているように，これらの区切りは厳密なものではなく，言語内外の様々な要素が加わって一定のグレーゾーンが存在している。次章では慣用句の発展の3段階を発話のストラテジーから説明し，「効果」「経済性」のバランスシートがそれぞれの段階でどちらに傾くかという点から様々な変形の成立が説明できることを示す。

5.　分析

5.1. 発展段階初期の変形

いわゆる自由語結合と慣用句が徐々に区別されていくプロセスと位置づけられる。発話が「効果的」であろうとするMaximeはコンテクストに依存した臨時のメタファーを生みだし，「経済的」に話そうとするMaximeは，一度用いたもののなかから，別のコンテクストでも使用に耐えるものを再利用したり，あるいは類似のものが同時多発的に生まれている状況ではそのなかから利用しやすい特定の形を選んで繰り返し用いるようになる。初期の慣用句はこの相関関係によって徐々に形をなすと考えられる。先にも述べたように，人間の言語表現は多くの部分が習慣的に決まった表現の再利用であり，「自由語結合」といっても実際には慣用句同様に異なるテキストで繰り返し「再生」される。Hopper（1987: 146）は任意にテキストの一部を挙げて，形式的に決まった表現とそうでない表現を区別することの困難を指摘している。慣用句と呼ばれる表現に関しても，「ありきたりなメタファー」や「習慣的によく使われる組み合わせ」との境界が曖昧なものが

多く存在するのは自然なことである。

このような初期段階の慣用句と考えられるのが形式の揺れが見られる慣用句である。形式に揺れがある場合，その変形同士は相互に入れ替え可能で，入れ替えによってコンテクストに影響を与えることはない。これまでの慣用句の変形の研究においても，多くの慣用句は，意味的コミュニケーション機能的に差異がないとされるVariationを持つとされている上，Variationの多さは慣用句度の低さの一つの特徴ともされている（Palm 1995：71）。つまり任意の連語句の単位としての安定性，言い換えれば言語共同体における習慣性の程度を計るために，Variationの有無が目安となりうる。複数の形（Variation）が辞典に記載されている場合にはまだ安定性が低く，一つの形だけが記載されている場合には慣用句として単位が安定していると見なすのである（vgl. Burger 1998：25, Burger u. a. 1982：67）。辞典の記載を基準とすることに問題がないわけではないが，辞典は多くの言語社会において（あるいは一般に大言語と言われる多くの話者を抱える言語の辞典ではとりわけ）表現の社会的定着度を計る目安としての機能があり，また現実にその役割が求められていることからもこのとらえ方にも一定の妥当性が認められる。では実際に慣用句度の低い慣用句にはどのようなものがあり，共通した特徴があるだろうか。複数の辞典に共通してVariationの記載のある慣用句にはたとえば以下のようなものがある：

11）（*jm.*） keine Ruhe <u>geben</u> [lassen] （しつこくせがむ，何だかんだといって相手を悩ませる）

12） *sich* <u>über *etw.*</u> [wegen *etw.*] keine grauen Haare wachsen lassen （事を気にしない）

13） *jn* um einen Kopf kürzer[kleiner] machen（人をクビにする）

11）はgebenとlassenが相互代入可であるが，この慣用句の場合，慣用句の意味と字義通りの意味の隔たりは非常に小さい。keine Ruhe geben（安ら

ぎ・平穏を与えない）を「しつこくせがむ」という意味に解釈あるいは狭化したものだが，仮にこの慣用句を知らなかったとしてもコミュニケーションに齟齬が生じる可能性はほとんど無いといってよい。またこの慣用句は，実際に慣用句的な使われ方と，字義通りの意味での使用の両方が見られ，区別が困難，あるいは両方の意味を含むような場合も少なくない。

> Fast eine Woche nach seinem ersten Ausbruch **gibt** der Vulkan Mayon auf den Philippinen weiterhin **keine Ruhe** und spuckt immer mehr Asche auf die Dörfer der Gegend. Nach Angaben des vulkanologischen Instituts gestern in Manila war es am Vorabend erneut zu einer Serie heftiger Eruptionen gekommen. Die Zahl der Evakuierten stieg auf beinahe 60 000 Menschen an. （St. Galler Tagblatt, 02. 03. 2000）

この場合は，火山の噴火が絶え間ないという意味であり，文字通りの意味で用いられている。

> David Berk ist Zeichner und lebt am liebsten allein. Er hat gerade ein Haus in den Dünen geerbt, ein verfallenes Paradies. Aber die Familie lässt ihm keine Ruhe. Sein erfolgreicher Halbbruder Cyrille zieht mit Frau und Tochter Nadine vorübergehend bei ihm ein. Seine eigene Tochter Biene ist drogenabhängig und wird schwanger von einem Mann, der sie schlägt. Und seine längst verstorbene Mutter Gezine erscheint ihm eines Nachts und spielt auf die rätselhaften Umstände ihres Todes an... （St. Galler Tagblatt, 06. 01. 2000）

この例の場合は慣用句的に，「しつこくせがむ」「何だかんだと悩ませる」という読みと同様に，周りの喧噪に自らも静寂が得られなくなるという，両方の意味が顕在化しているといえる。

Er beschäftige sich seit seiner Jugend mit den Fragen: Wer sind wir, woher kommen wir, warum sind wir hier, wohin gehen wir? Widersprüche im schulischen Religionsunterricht **liessen** ihm **keine Ruhe**. Seine Mutter habe ihn sensibilisiert für die übersinnliche Wahrnehmung der existieren den,feinstofflich- jenseitigen Welt.（St. Galler Tagblatt, 09. 10. 1999）

この場合は，Ruheは実際の静寂ではなく心の悩みであり，主人公は授業で受けた人間の生についての宗教的説明の矛盾に長く悩まされた。ここではほとんど慣用句的な意味で用いられていると言って良い。この慣用句のように字義通りの意味とメタフォリックな意味の隔たりが低い段階で異なる組み合わせが共存し続けることがわかる。

他方，11）とは異なり12）は，慣用句としての意味は完全にメタフォリックであり，文字通りの解釈と慣用句の意味には隔たりがある。しかしこの慣用句はgraue Haareは「苦労の象徴」であるという語意の共通認識にたっており，その意味でそれ以外の構成語との結束に固定性は低い。graue Haareを苦労の象徴として用いる表現がこの慣用句の形以外にも複数存在する。たとえば以下のような例である：

Seit Donnerstag sind die Schulen in Hessen wie ausgestorben. Lehrer und Schüler haben Ferien. Für einige Schulbedienstete fängt der Streß jedoch jetzt erst richtig an: Die Hausmeister müssen in der unterrichtslosen Zeit vieles erledigen, was sonst liegenbleibt. HOFHEIM. “Ich krieg **graue Haare**, wenn ich daran denke, was alles zu tun ist”, stöhnt Josef Porstner, einer von zwei Hausmeistern an der Main-Taunus-Schule. （Frankfurter Rundschau, 025. 07. 1997）

さらにgraue Haareを苦労を計る尺度（苦労の量と比例して増える）として用いた以下のような表現も多く見られる。

Kampfgeist führt zu Sieg　FSV Nibelungengrund fehlen sieben Spieler Lampertheim. Ein tolles Spiel sahen die Zuschauer beim Aufeinandertreffen des FSV Nibelungengrund und der Pool Players. Schon vor dem Anpfiff des sicher leitenden Schiedsrichter Dupin hatte FSV-Trainer Spies ein paar **graue Haare** mehr bekommen, denn er mußte gleich auf sieben Spieler verzichten. So spielten die "Letzten Zwölf" mit dem Mut der Verzweiflung gegen eine wesentlich jüngere Truppe der Pool Players.（Mannheimer Morgen, 22. 04. 1998）

動詞との結びつきも上記のkriegen, bekommenの他，graue Haare verschaffen，graue Haare sprießen lassen，graue Haare machenなど複数の組み合わせがある。慣用句として一般に認知されていなくともgraue Haare と動詞が結びついた場合，その組み合わせはそのままメタファーになりうる。この様な例から見ると，sich <u>über *etw*</u>. [wegen *etw*.] keine grauen Haare wachsen lassenという慣用句はgraue Haareのメタファー的意味に基づいて成立したコロケーションの一つに過ぎないことがわかる。13）の慣用句の場合も12）の場合とほぼ同じで，Kopfのメタファー的意味に基づいて成立したコロケーションの一つと言える。Kopfは人間の誇りを象徴的に示すのに一般に用いられるメタファーである。その頭の高低で人の意識のあり方を示すような表現は数多く存在する。例えば，den Kopf hängen lassen（意気消沈する），den Kopf hoch tragen（昂然としている），den Kopf oben behalten（意気軒昂としている），Kopf hoch!（元気を出せ）などである。さらに12), 13）の慣用句に共通して言えることは，これらの慣用句を成り立たせているメタファーが，名詞句のメタファーから簡単に導き出され得るという点である。メタファーとして広く用いられるようになる表現は，人々の理解・共感を得やすいものである。言い方を変えれば誰にでも思いつくメタファーなのである。その分，いろいろな場所・共同体の中で微妙に異なる表現が同時にいくつも生まれるのは自然な現象である。

これらのことから，共時的に見て1）慣用句と自由語結合との意味の隔た

りが低いもの，2）構成語の一つのメタファーに依存して発生したものに関しては数多くの類似表現が共存している，つまりはまだ慣用句度の低い慣用句と考えられる。

以上を発話のストラテジーの観点からまとめると以下のようになる。

効果： より様々な表現をしようと臨時のメタファーが産まれる。コンテクストに依存。
言語経済性：共感を得たメタファー，普遍性を持ちうるメタファーがいくつかの形に絞り込まれていく。

意味的形式的固定性：低
メタファーのわかりやすさ：高
イディオム性：低

5.2. 発展段階中期の慣用句

形式的には，Variationの存在が慣用句度の低さの特徴であるとすれば，慣用句度の高まりはVariationの淘汰につながる。つまり辞典にVariationの記載のない慣用句がこの段階にある。たとえば以下のような慣用句である：

14） Öl ins Feuer gießen
15） mit der Wurst nach dem Schinken werfen
16） die Katze im Sack kaufen

これまでの言語変化の研究によれば，言語は時間と共に音韻的にも形態的にも弱化（Reduktion）していく傾向が一般に認められる（*vgl*. Lehman 1989：14）。慣用句に関して言えばメタファーとしての「効果」の側面が徐々に失われていくプロセスがこれにあたる。上記の慣用句に関してはメ

タファーの構成は共時的には理解可能な範囲にあり，慣用句としては言語共同体の語彙の中に完全に組み込まれた表現である。発話のストラテジーの「効果」と「言語経済性」はこのレベルでどのように作用するだろうか。まず「効果的であろう」とする側面においては，新鮮な印象が薄れステレオタイプ化している慣用句の意味的側面を再び活性化する手段が講じられなければならない。一つは，BurgerがModifikationと名付けた臨時の慣用句の使用がここに位置づけられる。14）Öl ins Feuer gießenという慣用句に関しては，以下のようなタイプのModifikationが頻繁に見られる：

> Die Praxis der Abschiebung algerischer Flüchtlinge aus Deutschland nach dem Abkommen falle dem Bemühen um friedlichen Ausgleich zwischen den algerischen Konfliktparteien in den Rücken, sie **gieße** “**Öl ins** algerische **Feuer**”. “Kurzatmiges machtpolitisches Vorgehen und keine Außenpolitik” nennen sie das Abkommen, das künftige Beziehungen belasten werde.（Frankfurter Rundschau, 02. 06. 1997,）

> David d’Alessandro, Präsident von John Hancock Financial Services, **giesst** weiter **Öl ins** olympische Skandal**feuer**. Nachdem er vergangene Woche in New York angekündigt hatte, dass die zu den elf weltweiten Olympiasponsoren gehörende John Hancock Versicherungen die olympischen Ringe von ihren Billboards in den USA entfernen werden und Verhandlungen mit NBC über TV-Werbung in der Höhe von 20 Mio. Dollar vorläufig einstellen, erklärte er nun im "Sydney Morning Herald", dass für ihn das Bewerbungskomitee von Sydney 2000 zumindest den Anreiz zur Korruption geliefert habe.（Züricher Tagesanzeiger, 17. 02. 1999）

Öl ins Feuer gießen（悪い事態を更に悪化させる）という慣用句は完全にドイツ語の語彙体系に組み込まれており，この表現によって事態に新鮮なイメージが喚起されることは期待しにくい。そこでFeuerを 上例のように

Modifikationすることで（algerische Feuer，olympische Skandalfeuer），悪い事態（＝アルジェリア，オリンピック関係のスキャンダル）が火であり，そしてそこに追い打ちをかける現実のさらに悪い事態が油であるという対応関係が明確になり，状況が映像となって人の意識に浮上してくる。つまり慣用句が習慣化することで一度失われたメタフォリックなイメージ効果がModifikationによって再び活性化するのである[5]。

Modifikationはコンテクストに依存した一度限りの慣用句の構成語の拡張であるが，コンテクストへの依存性が弱く，普遍的に用いられるようになる拡張もある。

17）sich etw. im Kalender（rot）anstreichen（物事をよく覚えておく）
18）etw. schwarz（in schwarz）sehen（物事を悲観的に見る）
19）（große） Augen machen（びっくりする）

これらは言語共同体の中ですでに語彙化されており，辞書登録もあるという意味で臨時の変形であるModifikationのカテゴリーと区別される。習慣化した拡張表現はErweiterungとも呼ばれ[6]，文字通りの意味が作るメタファー力を再生させようとする発話のストラテジーが産んだ変形現象と位置づけられる。上記の17）*sich etw.* im Kalender（rot）anstreichenはrotを加えることによって慣用句の文字通りの意味を再び意識の前面に浮かび上がらせる効果を狙ったものであり，それが習慣化・普遍化したと考えられる。さらに，この慣用句について，現在では以下のような変形もしばしば見られ

---

5) 一度人々の意識から遠ざかったメタファーの具象性（Bildlichkeit）がModifikationによって再び前面に押し出される現象はRemotivierungと呼ばれる（Burger 1998：68）。
6) Fleischer 1997：207f.

る。

> Die Eishockey-Freunde im Land Salzburg müssen sich schon jetzt den Samstag, 28. Dezember, in ihrem Kalender dick rot anstreichen: Die Salzburger Nachrichten veranstalten an diesem Tag im Salzburger Volksgarten (Spielbeginn 19.30) ein Benefizspiel zwischen einer Salzburger Auswahl (bestehend aus den besten Spielern des Bundesligaklubs EK Zell am See und des Nationalligateams EC Salzburg) und dem deutschen Spitzenteam SB Rosenheim. (Salzburger Nachrichten, 23. 11. 1991)

rotによって慣用句の映像的イメージは再生されたものの，その表現が習慣化すれば再び新鮮さは損なわれる。言語変化一般法則として挙げられる意味の弱化現象（Reduktion）である。そこで再びイメージを活性化するためにdickという副詞が拡張されたのがこの例である。このdickによる拡張用法は他にも例が見られることからModifikationを「特定のテキストのために一度限り作られる変形」と位置づけるなら，その枠は越えている。しかし未だ辞書に登録されるには至っていないため，習慣化のプロセスにある表現と位置づけられる。このdickが習慣化すれば更に別の強化策が必要となる。つまりエンドレスにこの措置は繰り返される可能性がある。

他方，社会事情等の変化でメタファー構造の理解に支障が出て，そのために印象を与えることが出来なくなる場合もある。15）mit der Wurst nach dem Schinken werfenは字義通りには「ソーセージをハムに投げつける」，であり，慣用句の意味は「価値の低い物でより価値の高い物を得ようとする」である。このメタファーを理解するためにはソーセージよりハムの方が高価であること，ハムは加工の際に天井からつるして置かれる事などの価値観・知識を共有していなければならない。このような慣用句の場合，世代，社会階層，知識程度などによってメタファーの理解に差が出てくる。Munske（1993: 512）は特定の場所・状況（この場合ハムの加工場）との関

係性や，メタフォリックな起源は時間と共に人々の意識から失われやすいと述べている。共時的にメタファー構造が完全に理解できなくなったものは次章で扱う「イディオム」と呼ばれる段階へ移行する。

一方，言語経済的であろうとする発話のストラテジーはこのレベルの慣用句にどう作用するだろうか。含意と表現力を期待されていた慣用句がその効果が得られなくなった時，その存在意義も揺らぎ，結果的に形式にも変更が迫られると考えられる。言語変化のプロセスに見られる一般的現象に，縮約（Abkürzung）がある。縮約が起こる要件は1. 元の語が長大であること，2. 大変によく使われる表現であること，とされる（語彙の研究と教育（下） 1985：69)。表現力を失うほどにステレオタイプ化した慣用句はまさにこの要件に合致する。例えば以下のような省略形がこれに該当する：

> Für besonders wichtig halte ich den Hinweis auf Seite 280: “**Die Katze im Sack** muß nicht sein.” Da CD-Roms nicht gerade billig sind, werden hier Adressen ge nannt, bei denen CD- Roms ausgeliehen werden können oder zumindest einsehbar sind. Natürlich ist es immer schwierig, sich auf Kritiken zu verlassen, wenn man den/die Kritiker nicht kennt. Sehr hilfreich ist deshalb die Möglichkeit, CD-Roms vor dem Kauf einer eigenen Kritik zu unterziehen.（Frankfurter Rundschau, 012. 03. 1997）

これはdie Katze im Sack kaufen（中身を良く吟味しないで買う）という慣用句のkaufenが省略された形である。省略形の場合，残った構成要素に慣用句全体の意味が凝縮される（Fleischer 1997：210 f.） 上記の例では「袋の中の猫であってはならない」は，「袋の中の猫（を買うようなこと）であってはならない」と理解される。die Katze im Sack kaufenという慣用句が広く語彙に定着しており，すでにその一部を言えば句全体が想起されるため，全体を述べることはかえって冗長になる。

さらに縮約の延長上に位置づけられるのが「派生」（Derivation）である。言語の語彙の中には，慣用句に由来する単語（造語）が相当数見られる。例えば以下のような語である：

	慣用句	造語
20）	an der Nase herumführen	nasführen
21）	lange Finger machen	Langfinger, langfingrig, Langfingertum usw.
22）	ein dickes Fell haben	Dickfelligkeit
23）	den Kopf hängen	kopfhängerisch
24）	sein Gesicht verloren	Gesichtverlust
25）	sich den Hals brechen	halsbrecherisch

（*vgl.* Fleischer 1997 ： 186ff.）

縮約も派生も形として残るのはその慣用句の中で意味的に中心をしめるもの，多くは名詞句であり，動詞は一般に省略の対象になりやすい。省略は臨時の変形であるが，同じ臨時の変形でも先に挙げたModifikationと異なり，コンテクストへの特別な影響を狙ったものではなく，むしろ含意や表現力強化とは反対の，エネルギー節約の方向へ向いた変形である。また省略はコンテクストに依存し，「個人的な」モティベーションによって起こるものだが，このような省略形を作るのは人間の言語使用の普遍的な傾向であり，現象としては「集団的に」見られる。同じ省略形が異なるテキストで複数現れるのもModifikationと異なる点である。同じ慣用句を対象に，「効果」と「経済性」という異なるストラテジーの元，別々の方向に向いた変形操作が起こっているといえる。

以上を発話のストラテジーの観点からまとめると以下のようになる。

意味的・形式的固定性：中

メタファー構成のわかりやすさ：中

イディオム性：中

効果：. Modifikation　ルーティン化した表現の活性化,
　　Erweiterung　失われたメタファー力の再現
言語経済性： Abkürzung, Derivation　分かり切った表現の縮約

5.3. 発展段階後期の慣用句

いわゆる典型的慣用句といわれるイディオム性の高いもの，すなわちメタファーの認識度が低いものがこの段階にあたる。一般に議論の余地がなくイディオム性が高いものとしてあげられるのが時代の変化によってメタファーの由来がわかりにくくなったり，時代背景に合わなくなった慣用句（26), 27)）や，現在では慣用句外では用いられないような単語が含まれているもの（28), 29), 30)）がある：

26）jn.[et.] durch die Hechel ziehen（人[事]をこきおろす）
27）seinen Kohl pflanzen（単調な生活をする）
28）Kolhdampf schieben（空腹である）
29）gang und gäbe sein（普通である）
30）Maulaffen feilhalten（口を開けてぽかんと見ている）

26）のHechelは元来，麻などをこく器械のことであるが，現在この器械のことを知っている人間はごく限られていると言って良い。この慣用句は慣用句の形としては現在の言語使用の中では見られなくなってきており，その代わりその派生形であるdurchhechelnが生きている。このような移行は，5.2.で挙げた，派生語が生じた慣用句にも言えることである[7]。27）に関し

7) 例えば lange Finger machen は実際に派生語の方が使用頻度が高くなってきている（*vgl.* Nakagawa 2003：88 f.）。

ては，「単調な生活」に「キャベツを育てる暮らし」がメタファーとして機能しにくくなっているということがあり，現在ではほとんど使われなくなってきている。28）– 30）は単語レベルで理解不可能なのでメタファー構造はもちろん理解の範囲を超えている。慣用句が成立した時代には日常的なメタファーであり，時代と共に言語が変化したにもかかわらず慣用句の中の語彙はそのまま保存されたため（単語の化石化と呼ぶ）結果的に意味的・統語的に不可分の単位（イディオム）を作ることとなった。Kohldampf やMaulaffenは，自由語彙としては現在はほとんど見られないが，この慣用句の存在によって，慣用句全体の意味が凝縮されたものとして用いられることがある。

> Am besten steigen Hungrige aber gleich in den nächsten Zug Richtung Hauptbahnhof, der sich von seiner Raver-freundlichen Seite zeigt. Zwei Snackbars sind die ganze Nacht geöffnet, und wer schon morgens um fünf richtig **Kohldampf** hat, findet in der «Rösti»-Bar Einlass, wo der Name bereits das Angebot verrät. .（Züricher Tagesanzeiger, 07. 08. 1998）

ここではKohldampf habenはほとんどHunger habenと同義である。Kohldampf habenはschiebenに次いで相当数見られる形であるが，同時にseinen Kohldampf stillen, einen Kohldampf verspüren, den Kohldampf befriedigenなどその他様々な形も見られ，Kohldampf habenという新しい慣用句が出来つつあると考えるよりは，KohldampfをHungerを意味する語彙として位置づける方が妥当であると考えられる。Kohldampfは語源的にみれば，元々単独でHungerを意味していたものだが，上記の使用が古い語彙の継続または復活なのか，Kohldampf schiebenの縮約なのかは，判断の難しいところである。しかしたとえ古い語彙の継続であると判断するにしてもこの慣用句の存在がKohldampfという単語の存続に関与していると考えることができよう。一方のMaulaffenも単独で「ぼーっとした人間」を指すために用

いられている事例がある：

> In der Kellergasse tut sich was! In Zellerndorf etwa, wo Winzer Samstag und Sonntag von 14 bis 20 Uhr in die “Maulavern-Kellergasse” laden. Die Zellerndorfer sollen wie “**Maulaffen**” gestaunt haben, als die Bahn errichtet wurde. Josef Diem und Rudolf Langer: “Es gibt bei uns viel zum Verkosten!” (Neue Kronen-Zeitung, 18. 06. 1997)

Kohldampfについては実際の空腹ではない，メタフォリックな飢餓感にも転用されている。

> Angesichts von fünf Millionen Arbeitslosen und des immer größer werdenden sozialen Elends müsse die Regierung Kohl endlich abgelöst werden. Yasaner bekennt: “Ich habe **Kohldampf** auf einen politischen Wechsel in Bonn.” (Frankfurter Rundschau, 06. 02. 1998)

ここでは「ボンの政治の交代を渇望している」という意味である。このようなメタフォリックな使用はすでにKohldampfが新たな慣用句の材料となる可能性を示唆している。

以上を発話のストラテジーの観点からまとめると以下のようになる。

意味的・形式的固定性：高
メタファー構成のわかりやすさ：低
イディオム性：高

効果：慣用句の派生語を素材に新たなメタファーの生成
言語経済性：Derivation　表現力を失った慣用句の派生語化

6. おわりに

言葉によるコミュニケーションは，言語表現に効果と経済性を同時に求めて言語そのものに変化をもたらし，言語は常に新たな体系化を経験している。本稿では慣用句における変形の要因，動機付けを発話のストラテジーに求め，多様な変形句を慣用句の発展段階という観点に照らして分類することによって，慣用句を言語変化の流れの中で説明することを試みた。変形句のうち，Variationは発展の第一段階にある慣用句，つまり慣用句としての完成度が低い慣用句に見られることが認められた。他方，Modifikationはメタファーの認識度と深い関係があることが明らかになった。つまり，メタファーとして習慣化したもの，ステレオタイプ化したものでありながら，メタファー構成が共時的に理解の範囲にある句がModifikationされやすく，慣用句の完成度としては第2段階にあたる。従来の研究で典型的慣用句としてあげられるイディオム性の高いもの（本稿では第3段階の慣用句にあたるもの）の変形は，本稿での調査に依ればむしろModifikationであるよりは，省略形や派生形である。

本稿では慣用句の発展を便宜的に3段階に分けたが，全ての慣用句が一律にこの発展段階を経ると言えるのか，もし言えないとすれば，それは個々の慣用句の形式・意味・あるいは語用論的機能などのどこに起因するのか，などの問題についてはさらに多くのサンプルにあたる必要がある。この調査を進めることによって，発話のストラテジーと慣用句の意味・形式の変化の相関関係がより明確になる。そしてその結果は慣用句の問題ばかりではなく，語彙システム全般の問題の解明につながると考えられる。

参考文献

Burger, Harald: *Phraseologie. Eine Einführung am Beispiel des Deutschen*. Berlin 1998.
Burger, H./Buhofer, A./Sialm, A.: *Handbuch der Phraseologie*. Berlin 1982.
Burger, H./Linke, A.: Historische Phraseologie. In: *HSK 2.1.:Sprachgeschichte*. 2 Aufl.

（1998） S.743−755.

Coulmas, Florian: *Routine im Gespräch*. Wiesbaden 1981.

Dobrovol'skij, Domitrij/ Piirainen, Elisabeth: Symbole in Sprache und Kultur. *Studien zur Phraseologie aus kultursemiotischer Perspektive*. Bochum 1996.

Fleischer, Wolfgang: *Phraseologie der deutschen Gegenwartssprache*. 2.Aufl.Tübingen 1997.

Hopper, Paul J.: Emargent Grammer. In: *Berkeley Linguistics Society*（BLS13）. February 14−16（1987）S.139−155.

Keller, Rudi: Sprachwandel. *Von der unsichtbaren Hand in der Sprache*. Tübingen 1990.

国立国語研究所『語彙の研究と教育（下）』東京 1985.

Lakoff, G/Johnson, *M.: Metaphers, we live by*. Chicago; London 1980.

Lehmann, Christian: Grammatikalisierung und Lexikalisierung. In: *ZPSK* Bd.42.（1989） S.11−19.

Munske, Horst Haider: Wie entstehen Phraseologismen? In: *Vielfalt des Deutschen*. Festschrift für Werner Besch.（1993） S.481−416.

佐藤信夫『レトリック感覚』東京 1992.

Nakagawa, Junko: Üerlegungen über die Variabilität von Phraseologismen. In: *Deutschunterricht in Japan* Bd.8.（2003）S. 81−90.

Palm, Christine: *Phraseologie*. Tübingen 1995.

Stubbs, Michael（1997）: „Eine Sprache idiomatisch sprechen“: Computer, Korpora, Kommunikative Kompetenz und Kultur. In: *Norm und Variation*. Frankfurt am Main; New York. S.151−167